



Title	〈癒し〉としての騙り : Seize the Dayにおける「貨幣」、タムキンをめぐって
Author(s)	渡辺, 克昭
Citation	大阪外大英米研究. 1995, 20, p. 115-137
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈癒し〉としての騙り
— *Seize the Day* における
「貨幣」、タムキンをめぐる —

渡 辺 克 昭

Was he a liar? That was a delicate question.
Even a liar might be trustworthy in some ways.
— Saul Bellow, *Seize the Day*

I

ソール・ベローのノヴェラ『この日をつかめ』(*Seize the Day*, 1956) は、これまでも様々な角度から論じられてきたが、この作品を読み解く鍵を握っているのは主人公トミー・ウィルヘルム自身ではなく、ドクター・タムキンであろう。ベローはあるインタビューで、「私の興味を引くのは、センチメンタルなトミーではなく、あのよこしまな詐欺師タムキンの方だ」と述べている¹。その謎めいた正体ゆえに、ウィルヘルムのみならず読者をも魅了するとともに幻惑してきたタムキンは、実際この小説の空間と時間を統括し、それらを繋ぎ止める重要な役割を担っている。すなわち、グロリアナ・ホテル、先物取引所、葬儀場という対照的な三つの空間を結び付け、それらの空間に対応する過去、未来、永遠の現在という時間を作品に導入し、それぞれの時空にウィルヘルムと読者を誘うのはまさしく彼に他ならない。

近年、この作品に関する批評家の関心は、水のイメージラリーや²、ウィルヘルムの心理・性格分析や、最後の葬儀場の場面における彼の覚醒の可否といったものから、この作品の相互テキスト性や³、ドクター・タムキンのアイデンティティーをめぐるものへと推移してきた。そこまでまず問題になるのが、タムキンのパーソナリティーと彼の言説の間に見られる甚だしい乖離

である。言い換えればタムキンは、彼が口にする深遠でもっともらしい哲学的ディスコースを体現するには、あまりにも奇矯であり、いかがわしいのである。

Gilead Morahg は、“The Art of Dr. Tamkin”において、「ドクター・タムキン＝芸術家としての作家」という図式を用いてこの矛盾を説明しようとした⁴。この作品でベローは、自分の伝えたい倫理的見解を押し付けがましく説教するのではなく、それを読者に新たに発見させるために、敢えて説教者の人格と言説の間に劇的な落差を設けたと彼は推論する。彼によれば、作家として、普遍的な「真実」を提示することによって、病めるヒューマニティーを救済しようとするベローは、逆説的ながら想像力こそがそれをなし得ると確信していた。それゆえ、様々なレトリックを弄してウィルヘルムを手玉に取る詐欺師タムキンは、究極的な「真実」を伝達すべく想像力を駆使して虚構を紡ぐという点で、読者を操作する物語作者と比肩し得る立場にいるというわけである。

「騙り」が「語り」に通ずることは、改めて論じるまでもないが、Morahg の論文は、次の二つの点で興味深い論点を孕んでいる。まず、彼自身は言及していないが、このような解釈がメタフィクショナルな読みに繋がるということである。操作する者とされる者、騙る者と騙られる者という、タムキンとウィルヘルムの関係を、作者と読者の関係、ひいては作者と作中人物の関係へと読み換えることは、あながち不可能なことではない。相互テクスト性の観点から言えば、彼らのメタフィクション性を帯びた関係は、この作品の二年後に発表されたジョン・バーズの『旅路の果て』(*The End of the Road*, 1958) のジェイコブ・ホーナーと、彼に神話療法を施す得体の知れないドクターとの間に見られるメタフィクショナルな関係⁵に少なからぬ影を落としている。

だが結局のところ、タムキンと物語作者との類比性を指摘する Morahg の論考は、タムキンのパーソナリティーと言説のギャップを十分に説明するには至っていない。タムキンが物語作者のような「騙り手」であったとして

も、ベローが、自分自身とはあまりにも大きな隔たりがあるタムキンのような人物を創造しなければならない必然性はないのである。タムキンと同じように、得てして作家というものは、小説の中で唱えた言説を実生活において実践できないものであるといった Morahg の論評は⁶、いささかの外れであろう。

タムキンは、作者が単に自分の思想を偽装するために考察した、口が巧みで偽悪的なペテン師なのではない。彼のアイデンティティーは、彼が確固たるアイデンティティーを欠き掴み所がないという、まさにその変幻自在性にある。このように見れば、“He could be both sane and crazy”⁷ という、パール氏の冗談めいたタムキン評は、案外真実を言い当てている。ウィルヘルムは、タムキンを、“liar”(79, 129), “plunger”(112), “bogus and humbug”(129), “charlatan”(130), “swindler”(134), “operator”(134) などとペテン師呼ばわりする一方で、それだけでは割り切れない不思議な吸引力を彼に感じている。彼は、“Was he a liar?”(79)、“Was Tamkin a lunatic, then?”(112) と幾度となく自問しつつも、タムキンの弁舌に知らず知らずのうちに引き込まれていく。“Funny but unfunny. True but false. Casual but laborious, Tamkin was”(90) と述べられているように、タムキンはあらゆる面で両義的な矛盾した存在であり、そのことは何よりもタムキン自身のディスコースの両義性に起因している。

テキストの中からおぼろげに浮かび上がるタムキンのプロフィールは、心理学者、精神分析医、催眠術師、魔術師、治療師、詩人、哲学者、詭弁家、宗教家、科学者、発明家、投資家、ブローカー、詐欺師のように、ほとんど錬金術師とも見紛うばかり広範な領域に及んでいる。これらすべてに共通するのは、彼が何らかのかたちで異界との交通を媒介し、日常と異次元の世界との交渉を司っているということである。しかも彼は、同時にこれらのすべてのものであるがゆえに、厳密な意味でこれらのどの一つでもなく、それぞれの分野における彼の legitimacy は極めて疑わしい。この矛盾した存在の多義性と曖昧性、機能の両義性と逆説性こそが、タムキンをタムキンた

らしめているのである。

このように見ると、タムキンが、盗み、雄弁、交易、交渉、技能に秀でたヘルメス神やトリックスターの持つ神話的特性を多分に帯びていることがわかる。悪であるとともに善でもあり、破壊者であるとともに創造者であるトリックスターは、Molly S. Wieting が示唆しているように⁸、タムキンの容貌が象徴するような彼の動物的とも言える卑しい属性と、それとは正反対の神性を孕んだ彼の救済者的役割の矛盾を説明するには格好のモデルを提供する。また、Roberto Birindelli が論じているように⁹、ヘルメスをはじめとするギリシャ神話の枠組みを基にした議論は、この作品の解釈をさらに奥行きのあるものに行っている。とりわけ、ヘルメスが魂の導者プシュコーポスでもあり、冥府と現世を媒介する司祭であるということを考えてみれば、万策尽きたウィルヘルムがタムキンの姿を追い求めていくうちに偶然にも葬儀場へ紛れ込んで泣き崩れるという結末は、テキストに神話的豊饒性を付与するとともに、タムキン＝ヘルメス説の有力な論拠となるであろう。

しかしながら、タムキンがヘルメス的トリックスターであるということを指摘するだけでは、〈騙り〉と〈癒し〉が交錯した、タムキンとウィルヘルムの複雑でアンビヴァレントな関係を分析するにはまだまだ不十分であると言わざるを得ない。小論では、トリックスター神話が、トリックスターによる医療儀式に少なからぬ意義を与えていることを踏まえ¹⁰、タムキンの「貨幣」を思わせるトリックスター性が、ベローにしばしば見られる〈癒し〉というテーマとどのように関わっているのかを論じてみたい。

II

ある時タムキンは、ウィルヘルムに、自らを称して “my real calling is to be a healer”(129) と語るが、いささかアナクロニスティックで呪術的な趣きのある “healing” もしくは “healer” という言葉は、ベロー文学においては特段の重要性を有する。例えば、『この日をつかめ』の3年後に発表された『雨の王ヘソダソン』(*Henderson the Rain King*, 1959) は、作

品そのものが〈癒し〉の書であると言ってよい。“I want. I want. I want.”という幻聴に悩まされ、精神的に満たされぬ富豪ヘンダソンは、若き日に医学を修めたダフー王という“healer”に、アフリカの奥地で遭遇し、一定の〈癒し〉のセラピーを施された後、今度は自らが人々を癒す“healer”となることを夢見て新大陸アメリカへ帰還する。「癒される者」から一転して、人類救済の使命を帯びた「癒す者」「healer」へと変身する決意をした彼は、妻リリーに宛てた手紙の中で、次のように胸中を述べている。“Therefore, I may apply for missionary work, like Dr. Wilfred Grenfell or Albert Schweitzer. Hey! Axel Munthe—how about him? ... I do want to get my hands on the sick. I want to cure them. *Healers are sacred* (イタリックは筆者).”¹¹ 50歳を過ぎて医師を目指すヘンダソンにとって、“healer”とは、専ら現代医学によって身体的疾患を診療する医者というよりもむしろ、病める肉体の元凶である精神の根源的な治癒を図る、ダフー王のような聖なる魂の司祭を意味する。膨大な医学文献を蔵し、端倪すべからざる学識を持つものの、ダフー王は、正確な意味においては医師ではなく、恒常的に医療活動に従事しているわけでもない。彼の主たる関心は、人間の肉体と精神の相互関係を究めるところにあり、アッティという雌ライオンを用いて彼は、ヘンダソンの死に対する限りない恐怖心を癒すべく、おおよそ正規の心身医学療法とは程遠い風変りなライオン療法を彼に施す。

タムキンには、ダフー王に見られる超然とした王者の風格が見事に欠落しているが、基本的にタムキンとウィルヘルムの関係は、ダフー王とヘンダソンの関係に等しい。タムキンのおぞましさと俗物性は、ウィルヘルムのだらしなさと精神的背丈の低さに対応するものであり¹²、ダフー王の求道者的な高貴さは、懊悩する巨人ヘンダソンの精神エネルギーの振幅の大きさと釣合を保つために必要なのである。いずれにせよ彼らの間には、一種独特のパートナーシップが構築され、カウンセリングを施す精神分析医と患者といった一方的で単純な図式には決して収まらない、互酬的な盟約関係が生じる。

雨乞いの祭りにおいて自らの力技によって雨を降らせ、ダフー王との賭に

破れて雨の王となったヘンダソンは、真実の探求を目指して王と腹藏なく話し合うために、彼と「協約」「a pact between us」を結ぶ。この「真実の協定」「our truth agreement」は、彼らの精神的紐帯の証となる。だが、王から難解な医学論文を渡され、ライオンのごとく咆哮する訓練を連日に渡って施されるヘンダソンは、時として、王の途方もない博識ぶりと奇抜な言動に戸惑い、王が「いかれた変人」「crank」ではないかとさえ疑う。一方、賭に勝ってヘンダソンを雨の王サンゴに就任させたダフー王も、ワリリ族においてサンゴが負うことになる恐るべき責務に関しては、死の直前に至るまで敢えてヘンダソンに秘している。言うなれば、ダフー王は、後継者としてヘンダソンをある意味で政治的に利用したのであり、死というあまりにも大きな危険を伴う雨の王にヘンダソンを祭り上げるという一種の〈騙り〉を行う一方で、その見返りに王は彼に〈癒し〉のセラピーを施したことになる。

ウィルヘルムの場合、タムキンとの連携は、先物市場で自分の資金を運用する権限を全面的に委ねる投資上のパートナーとして始まる。長い間考えあぐねた末、何度となく退けたことを最終的に選択してしまうのが常の彼は、散々迷った挙げ句、物語の始まる4日前にタムキンへの投資委任状に署名し、二人は互いに相手宛てに小切手を振り出し交換している。この時タムキンは、彼らが対等の共同出資者であるという前提にもかかわらず、すぐには資金を動かさないことを口実に、自分の出資金の当座の不足分をウィルヘルムに補てんさせる。ウィルヘルムは、いかにも偽物めいた緑色の額面300ドルの小切手をタムキンから受取り、それと交換に1000ドルの小切手を支払日を一日繰り延べにして彼に切る。こうして彼は、最後の財産700ドルの運用をタムキンに全て委任してしまったのである。後で不安に駆られたウィルヘルムは、タムキンに対する委任状が彼の他の財産の投資と運用にも及ぶものかどうか仲買会社の支店長に確かめに行くが、700ドルが彼の全財産であってみれば、結局のところ彼はタムキンに自分の全てを委託してしまったに等しいことに気づく。

当初ウィルヘルムは、この投資を、逼迫した経済状態を少しでも打開する

ための、一か八かの “gamble”(83) であると自分に納得させていた。だが、本能的に彼が、この投機が無謀であり、勝算に乏しいと心のどこかで直観していたこともまた事実である。物語の舞台となる「この日」になってウィルヘルムは、数日前とは打って変わって、自分の決断について次のように悲観的な予感を持つに至る。“By now however, he had forgotten his own reckoning and was aware only that he stood to lose his seven hundred dollars to the last cent”(83). 賭に負けてヘンダソンがダフー王の食客となったように、ウィルヘルムはこれからはタムキンと運命を共にせざるを得ないと感じる。思い返せば、彼がタムキンを信用したのは、自分が誤りを犯す機が熟したと感じ、「独特の宿命的な気配をタムキン博士に感じとった」からに他ならない。

After a long struggle to come to a decision, he had given him the money. Practical judgment was in abeyance. He had worn himself out, and the decision was no decision....It was because Wilhelm himself was ripe for the mistake. His marriage, too, had been like that. Through such decisions somehow his life had taken form. And so, from the moment when he tasted the peculiar flavour of fatality in Dr. Tamkin, he could no longer keep back the money (79).

このような状況でウィルヘルムは、既に述べたように、タムキンに勧められるままに委任状に署名し、彼に小切手を振り出したのであるが、それは賭というにはあまりにも深い意味を持っている。なぜならば、この取引きにおいて彼は、タムキンに全財産の運用権を委譲することによって、事実上「白地小切手」“blank check”を切ったも同然であり、自分の全てを彼に委ねてしまったからである。『フンボルトの贈り物』(*Humboldt's Gift*, 1975)において、シトリーンが、フンボルトの提案により、義兄弟の契の証として

“blank check” を彼と交換したように¹³、ウィルヘルムはタムキンと小切手を相互に交換し、彼と盟約関係に入る。この時、彼がタムキンに宛てて振り出した小切手の効力は、タムキンの彼宛ての小切手が不渡りではないことを前提としており、一見、彼ら是对等の立場で “equal partners”(142) として互いを保障し合っているように見える。しかし、当初からタムキンに生殺与奪の権を握られているウィルヘルムにとって、小切手の額面の差額700ドルは、タムキンへの一時的な貸し付けと言うよりも、実質的には彼への一方的な贈与と言うべきものになっているのである。

しばしば誤解されるように、『この日をつかめ』の「この日」において、ウィルヘルムはタムキンに持ち金をまんまと詐取されるのではなく、物語の始まる時点で、既に彼のタムキンへの一方的贈与は完了している。別居中の妻マーガレットには幼い子供の養育費として執拗に小切手の送付を要求され、裕福な父アドラー博士からは財政的援助を頑なに断られ、失業中でホテル代にも事欠くウィルヘルムは、贈与という観点から見れば、あらゆる面でまことに皮肉な選択を行ったと言ってよい。すなわち、離婚に応じない妻から「贈与」を迫られるばかりか、名医の誉れ高い老齡の父からも「贈与」を拒まれたウィルヘルムは、タムキンという、得体の知れないもう一人のドクターを父親代わりに頼り、なけなしの金を彼に「贈与」せざるを得なかったわけである。

このウィルヘルムのタムキンに対する、命がけの跳躍ともいえる一方的贈与は、貨幣に対してなされる、「はじめの贈与」と呼ばれる不等価交換の行為と相通じるものがある。不換紙幣を例に取ればよくわかるように、どのような貨幣であれ、それを使用する者が、その貨幣の材質上の実質的価値と名目上の価値との乖離を不問にして、そこに額面通りの価値を認めて流通させなければ、その貨幣は貨幣として機能しない。その際、中央銀行は発券によってその乖離を実質的に負債として負うわけではないので、まず貨幣を手にする者は、その差異を貨幣を保持する間リスクとして負うことを免れない。岩井克人によれば、このことは貨幣の使用者から見れば「決して返済を期待し

得ない貸し付け」¹⁴であり、貨幣の創造には「一方で等価交換の前提条件としての不等価交換、他方で相互契約（交換）の前提条件としての全面的譲渡（非交換）」という逆説的構造が見られる。しかも、この一方的贈与は貨幣が流通する度に繰り返され、「市場で流通している貨幣はすべて、過去になされた一方的贈与の痕跡」¹⁵をとどめている。

ウィルヘルムのタムキンへの信用は、実体の裏付けを欠く紙幣に対する、このような「はじめの贈与」を実は反復したものに他ならない。彼はタムキンと対等のパートナーとして等価交換を行うことを前提に、投資委任というかたちで全面的に彼に財産の運用を委ね、事実上それを譲渡した。この行為を見る限り、ウィルヘルムのタムキンに対する信用は、不換紙幣に対する信用と相同であり、さらに正確に言えばメタ紙幣である小切手に対する信用と相同であると言ってよい。タムキンの小切手のいかにも不渡りとなりそうな緑の色合いと、ほとんど判別し難い奇怪な筆跡は、彼の実体の不透明さのみならず、彼の見せかけと実体の齟齬を暗示している。いずれにせよ、タムキンが比せられる紙幣もしくは小切手というものには、当然のことながら、先送りされた信用という問題が絡んでくる。ただの紙きれに過ぎない紙幣が、受け取られるのは、いつかそれを使用するときに、誰か次の人に受け取ってもらうという思惑が働くからである。穿った見方をすれば、紙幣の流通とは、無限の彼方へ決済を先送りして、現時点で自分が負っている「はじめの贈与」のリスクを他人に転嫁して売り抜けることでもある。

ところが、「総決算の日」“a day of reckoning”(130)である「この日」においては、このような「はじめの贈与」の決済を無限に先送りすることはできない。ここにこの物語の妙味がある。この点については、また後ほど詳しく論じるが、そもそもウィルヘルムは、将来売り抜けられると踏んでタムキンという怪しげなペイパー・マネーを掴んだばかりか、現在という時点では収穫さえされていない先物商品への投機という、ペイパー・ワークによる紙幣の増殖に賭けたのである。投資に勧誘するに際してタムキンは、信用の未来への先倒しである“speculation”の極意について次のように熱弁を揮

う。

“The whole secret of this type of speculation...is in the alertness. You have to act fast—buy it and sell it; sell it and buy in again. But quick! Get to the window and have them wire Chicago at just the right second. Strike and strike again! Then get out the same day. In no time at all you turn over fifteen, twenty thousand dollars' worth of soy beans, coffee, corn, hides, wheat, cotton” (14).

わずかな証拠金を元手に、巨額のドルを先物市場で機敏に動かして差益を稼ごうとするタムキンに、最終的決済を永久に先延ばしにして、専ら差異を媒介する貨幣の自己増殖性を指摘することは難しくない。またこのように“speculation”を司り、敏捷な貨幣性を有するからこそタムキンは、トリックスターとしてウィルヘルムを翻弄しつつも魅了するのである。貨幣さながらタムキンは、本質的な価値を欠いているにもかかわらず、あらゆるものに姿を変え、あらゆる間隙に出没しては均衡をもたらし、また新たな差異を求めて姿を消す。そして貨幣が、実質的価値とは無関係に、額面に記されたとおりの価値を持つものとして流通するように、“Tamkin was everything that he claimed to be,...”(79) という思いにウィルヘルムは時として駆られるのである。

III

ところで、ウィルヘルムがタムキンという「悪貨」を受け入れるに至ったのは、見せかけと実体の乖離ということにかけて、彼自身がタムキンとある種の親和性を持っていたためである。彼の中にはタムキンの分身と思しきものが寄生している。“When it came to concealing his troubles, Tommy Wilhelm was not less capable than the next fellow”(7) という冒頭の

文が示すように、若き日にスカウトされ、ハリウッドで端役を努めたこともあるハンサムなウィルヘルムは、演技力によって自分の本性を隠蔽して、人を欺く術を自然と身につけている。俳優となる夢が潰え、後にロジャックス社のセールスマンへと身を転じて、表面を取り繕う演技性は彼から抜けきることではなく、それはむしろ彼の有力な武器にすらなっていたのである。

ウィルヘルムにとって、彼をハリウッドへと誘い、彼の人生に大きな転換をもたらしたタレント・スカウトのモーリス・ヴェニスは、ある意味でタムキンの祖型である。いかにも胡散臭い風貌の持ち主である彼らに共通するのは、彼らがともに、躍起になってウィルヘルムの信用を得ようと働きかけることである。それにとどまらず彼らはいずれも、スターの地位の獲得や投機というかたちで“speculation”を司り、ウィルヘルムの人生の始点と終点を確定する役割を担っている。彼が父のアドラー姓を捨て、トミー・ウィルヘルムという名に改名する契機を作ったのがヴェニスであるとすれば、そのトミー・ウィルヘルムを破産させ、本来の自分ウィルキーへと戻るきっかけを作るのがタムキンである。ウィルヘルムのタムキンとの投資上のパートナーシップは、25年前に失敗に終わった彼とヴェニスとのパートナーシップをもう一度繰り返したに過ぎない。のちに、“pimp”(79)として売春の仲介の容疑で起訴されるヴェニスとの出会いが、ウィルヘルムにとって、「死の接吻」“kiss of death”(34)であったとすれば、もう一人の山師タムキンとの出会いもまた、別のかたちで彼に「死の接吻」をもたらすのである。

タムキンが捉えどころのない詐欺師として、ヴェニスよりも格段に優れた資質を持ち合わせているとすれば、それは彼の弁術の巧みさと彼の言説の含蓄の深さであろう。彼が口にするアフォリズムは、そのレトリックと相俟って、真実と虚構、正常と異常、日常と非日常といった二項対立の間隙をどちらともなく通り抜けるがゆえに、かえって鋭く本質を突いた命題として、“the deeper things of life”(93)を希求するウィルヘルムを自ずと思案へと誘う。この時、タムキンの司る“speculation”は、「投機」から「思案」へと新たなる転換を示すことになる。それに伴い、表面上の価値と本質的価

値との乖離を孕んだ彼の貨幣性は、意味するものとされるものとのズレを必然的に孕む記号の恣意性へと位相を変える。このことは、言うなればタムキンの「貨幣」から「言葉」への位相転換である。しかしながら、言説を発信する主体と発信された言説そのものが必ずしも合致しないという意味において、タムキンが体现している「見せかけ」と「本質」の齟齬というテーマに基本的に変化はない。ウィルヘルムを思索に導くタムキンの言説は、彼に対するウィルヘルムの投機上の信用と同じく実質の根拠に欠け、タムキン自身が自らのディスコースの意味するところを真に理解し、それを葉籠中の物にしているという保障はないのである。ウィルヘルムは、取り方次第では教訓的で深遠なタムキンの言辞に魅せられながらも、次のように彼の真意を訝る。

He spoke of things that mattered, and as very few people did this he could take you by surprise, excite you, move you. Maybe he wished to do good, maybe give himself a lift to a higher level, maybe believe his own prophecies, maybe touch his own heart. Who could tell? He had picked up a lot of strange ideas; Wilhelm could only suspect, he could not say with certainty, that Tamkin hadn't made them his own (111).

「心理学的詩人」を自称するタムキンのもう一つの面白さは、彼がウィルヘルムに説く心理分析のディスコースが、結果的に、自らの貨幣性なり記号作用に関するメタ的な自己言及となっていることである。例えば彼は、既に述べたように自らが貨幣性と投機性を色濃く帯びているにもかかわらず、カネ儲けは攻撃だ、人々はカネという記号によって象徴的に人殺しをするために取引所にやってくるのだと、投機の心理的メカニズムを得意気にウィルヘルムに説く。“This type of activity is filled with hostile feeling and lust....They go on the market with murder in their hearts”(16). ところがこれは、彼が先物市場で今まさに行おうとしていることの self-

reference に他ならない。彼が計らずも口にしたように、“Money”と同じように“M”で始まる言葉「殺し」「Murder」、「からくり」「Machinery」、「害悪」「Mischief」は、タムキンにとって“Money”である彼自身と同義語なのである。ここでタムキンは、自らの属性である「貨幣」には、犠牲を要求する暴力性、ひいては死の痕跡が見られると同時に、それらの暴力と死を象徴のレベルでかろうじて封じ込める犠牲の代理としての媒介者的役割があることを自ら暴露しているのである¹⁶。

タムキンの発信する様々なディスコースには、主として癒しを施す（騙る）自分に関するものと、癒すべき（騙るべき）ウィルヘルムに向けられたものがあり、それぞれが互いに連動しているが、その中で核心をなすのは、「本当の心」「the real soul」と「見せかけの心」「a pretender soul」(95)をめぐるものである。誰にもまして“a pretender soul”でありながら、“the real soul”に精通した媒介者タムキンは、一人の人間の中で展開されるこれら二つの心の葛藤を、心理ドラマ風に解説してみせる。彼によれば、基本的に人間には、何かを愛するという利他的な欲求と、自分が何者かであるというアイデンティティーの欲求があり、自分が何者でもないことに耐えられぬがために人を欺く「見せかけの心」によって、人間の本来の「本当の心」は大きな犠牲を被り、悶絶し、蝕まれていくという。「本当の心」にとって、社会に迎合し虚栄を愛する「見せかけの心」は、身中に巣くう「寄生虫」「parasite」(97)のごとき存在であり、このうえなく虐げられ苛まれた「本当の心」は、いたたまれず後者を殺めようとするに至る。この時、真実を愛す「本当の心」の愛は憎悪へと変貌し、自己の内部の他者に向けた刃が自らに跳ね返るという自家撞着に陥ることになる。“Whenever the slayer slays, he wants to slay the soul in him which has gypped and deceived him. Who is his enemy? Him. And his lover? Also. Therefore, all suicide is murder, and all murder is suicide”(96-97). このように力説するタムキンに対して、ウィルヘルムは、“this means that the world is full of murderers”(97)と偽らざる感想を漏らす。

タムキンの説く「見せかけの心」と「本当の心」の責めぎ合いのドラマは、その単純さにもかかわらず、論理の明快さとタムキンの催眠術師的な暗示によって、追真性を持ってウィルヘルムを自己省察へと導く。そして、トミー・ウィルヘルムなる「見せかけの心」に寄生されてきたことによって、彼の「本当の心」が、これまでいかに辛酸を嘗め、病んできたかということを彼に思い至らせる。だが、彼の「見せかけの心」と「本当の心」の対立の図式は、「見せかけ」と「本質」のズレを誰よりも具現しているタムキンが、「治療」という名目でそこへ介入する時、さらに複雑な様相を呈してくる。つまり、「見せかけの心」の最たるものとしてこれまでウィルヘルムに言わば分身のように寄生してきたタムキンと、ウィルヘルムの「本当の心」の間に奇妙な共謀関係が生じるのである。

考えてみれば、ウィルヘルムの「見せかけの心」は、多分に彼の父アドラー博士譲りのものであることがわかる。過去の栄光にすぎる引退した老人たちが多く住む、グロリアナ・ホテルの名士アドラー博士にとっては、世間体こそがすべてであり、ウィルヘルムの言葉を借りれば、彼はセールスマンしながら息子を他人に売り込み、ウィルヘルムの「見せかけの心」を助長さえする。虚栄心の強いアドラーは、自分を愛するあまりウィルヘルムの「本当の心」に気づかず、カネが死を果てしなく遅延する免罪符となるかのように、息子に譲ることを拒む。彼は、「本当の心」を説くタムキンの申し分のないフォイルである。ウィルヘルムが口論の末、アドラーと別れた直後に、タムキンが彼の前に姿を現すことが何よりも雄弁に物語るように、物語のちょうど半ばあたりで、ドクター・タムキンは、アドラー博士に代わって悩めるウィルヘルムを別の流れに誘導する。“The sight of Dr. Tamkin brought his quarrel with his father to a close. He found himself flowing into another channel”(78).

ウィルヘルムが、父に求めて得られなかったものは一言で言えば、〈癒し〉である。医学的な見地からアドラー博士は、救いを求める息子に、自らも実践しているという「水治療法」“hydrotherapy”(60)を勧める。ウィルヘル

ムにとってこの療法は、せいぜい見せかけの〈癒し〉であり、それが到底自分の苦悩を癒すものではないと直観した彼は “I thought that the water cure was for lunatics”(61) と不満を漏らす。これを冗談と受け止めたアドラーは、“Well, it won't turn a sane man into a lunatic. It does a great deal for me”(61) と答える。ミシェル・フーコーが、*Madness and Civilization* において考察しているように、“hydrotherapy” の歴史は狂気の歴史と同じく古く、十七世紀末頃からは狂気の主たる治療法と見なされてきた⁷⁾。浸潤性に富む水に浸すことでその浄化力によって再生を促し、狂気を癒すというディスコースが、まことしやかに信じられてきたのである。アドラーは “I thought that the water cure was for lunatics” という息子に無意識のうちに狂気を感じとり、自らが発した「水治療法」というディスコースによってウィルヘルムの逸脱を今度は制度のなかに封じ込めようとする。そのように見れば、物語の最後の葬儀場の場面においてウィルヘルムが、アドラーではなくタムキンによって、メタフォリカルな意味での水死を思わせる “hydrotherapy” を施されるのはまことにアイロニカルな結末というより他ない。狂気を隔離し封殺しようとするアドラーではなく、狂気と正気を媒介するタムキンが司る “hydrotherapy” は、ウィルヘルムに象徴的な死をもたらすとともに、〈癒し〉として歴史より新たに蘇るのである。

IV

この物語におけるタムキンの役割は、医学の権威である父アドラー博士の成し得ない〈癒し〉をウィルヘルムに施すことである。彼の施す精神的な〈癒し〉は、それと対極にあると思われる経済的な〈騙り〉と意外なかたちで結び付いている。「貨幣」であるタムキンの〈癒し〉は、逆説的ながら、〈騙り〉によってウィルヘルムの経済的破綻を決定的なものにし、彼の「見せかけの心」が崩壊する時に成就する。ウィルヘルムがタムキンと小切手を交換し、一方的贈与を行ったことは既に述べた。だが、経済的には全く一方的な贈与でありながら、死と再生という別の次元で彼らの間には暗黙裏に交

換関係が生じている。“Secretly, he [Wilhelm] prayed the doctor would give him some useful advice and transform his life”(98). “Everybody seems to know something. Even fellows like Tamkin....Recovery was possible”(105). これらの引用が示すように、ウィルヘルムは、タムキンに必ずしも信用が置けないにもかかわらず、彼が何らかの〈癒し〉を与えてくれることを密かに期待し、それに応じてタムキンは自らを騙ることによって〈癒し〉を施そうとする。“Tamkin, for all his peculiarities, spoke a kind of truth and did some people a sort of good”(87) と思うウィルヘルムに対して、タムキンは、“I have to do good wherever I can”(89)、“Now, Wilhelm, I’m trying to do you some good”(132) というように、自分が治療師として彼に益をもたらすことを再三に渡って仄めかす。彼らのいずれにとっても、“do good” というフレーズは、〈癒し〉を意味する心地よいジングルにさえなっているのである。

そこでタムキンは、ウィルヘルムに、エジプトの王女をはじめとする彼の患者の様々な病歴と治療の経過を暴露し、自己宣伝してみせるとともに、¹⁸これまで密かに彼に治療を施してきたことを告げる。このことは、ウィルヘルムを一瞬不安に陥れるものの、彼はタムキンが自分の身を案じてくれていることを嬉しく思う。治療師タムキンの奇抜な〈癒し〉の言説は、〈騙り〉と紙一重のきわどさゆえに、病めるウィルヘルムの心をかえって捉える。“...there was a great deal in Tamkin’s words....This time the faker knows what he’s talking about”(132-33). このように認めざるを得ないウィルヘルムにしてみれば、タムキンは、“One hundred falsehoods, but at last one truth”(133) を啓示してくれそうな「恵み深い魔術師」“a benevolent magician”(110) なのである。

彼がウィルヘルムに施す処方箋は、一言でいえば、表題の通り「この日をつかめ」“Seize the day” ということである。彼の意図とは裏腹に、この箴言には、タムキンが説く「見せかけの心」と「本当の心」の関係、投機の背後に見られる人間の罪悪感と攻撃性の問題、事実は常にセンセーショナルで

あり多くの人々は喜びよりも苦しみと結婚したがっているといった洞察などがすべて集約されている。タムキンは、自分の与える無償の〈癒し〉こそが、人々を現実に戻し、「今・ここ」“the here-and-now”をもたらすのだと、自らの医療行為について次のように騙ってみせる。

“With me,” said Dr. Tamkin, “I am at my most efficient when I don’t need the fee. When I only love. Without a financial reward. I remove myself from the social influence. Especially money. The spiritual compensation is what I look for. Bringing people into the here-and-now. The real universe. That’s the present moment. The past is no good to us. The future is full of anxiety. Only the present is real—the here-and-now. Seize the day”(90).

詐欺師タムキンにとって、「今・ここ」に相手の神経を集中させる“‘here-and-now’ mental exercise”(120)は、ウィルヘルムを催眠術のように意のままに動かし、判断停止に陥れる術策の一つなのであろうが、ウィルヘルムにとっては、自分の内なる「見せかけの心」を無化し、その支配から「本当の心」を取り戻すという一種のプラシーボ効用がある。「この日をつかめ」というテーゼは、その表層において、タムキンが司る投機の刹那性をよく言い表しているようにも見える。だが、深層においてはそれとは反対に、刻々と値動きする“speculation”の世界とは無縁の永遠の現在を内包している。「今・ここ」においては、「本当の心」と矛盾するいかなる「見せかけの心」も存在せず、罪悪感もなければ、攻撃も苦しみも犠牲も生じるべくもない。「今・ここ」しか知る術を持たない「自然」を引き合いに出して、タムキンは次のように説く。

“Nature only knows one thing, and that’s the present. Present, present, eternal present, like a big, huge, giant wave—colossal,

bright and beautiful, full of life and death, climbing into the sky, standing in the seas. You must go along with the actual, the Here-and-Now, the glory —”(120).

「今・ここ」は、「見せかけ」と「本質」の乖離のない世界である。言い換えるならば、それは「見せかけ」と「本質」が合致する「貨幣」を必要としない世界である。ところが、「この日をつかめ」の哲学を標榜するタムキン自身は、あらゆる意味においてこの言葉を裏切る存在であると言ってよい。既に論じたように、本来、貨幣性を色濃く帯びた彼の真骨頂は、「見せかけ」と「本質」の乖離に乗り、過去と未来の間を行きつ戻りつ往復して、それらの差異を媒介するところにある。このようにタムキンが自分を騙り、ウィルヘルムを「今・ここ」に繋ぎ止めようとすることは、「役に立たない」過去と「不安でいっぱい」未来のくびきから彼を解き放つと同時に、ウィルヘルムに自分の持つ貨幣性と投機性を否定してみせることを意味する。タムキンに託した過去の「信用」と未来の「配当」を彼によって拒絶された結果、ウィルヘルムの経済は完全に破綻をきたす。彼は、先物市場における「未来からの贈与」である株の値上がり期待できないばかりでなく、過去に彼が「はじめの贈与」としてタムキンに与えた元手の700ドルの回収すら覚束なくなるのである。タムキンに付き合っただけで昼食に時間をかけている間に、ウィルヘルムが買ったラード株は暴落し、堅調であったライ麦株さえも売る機会を失する。そして、彼が全財産を託したタムキンは、ウィルヘルムの過去と未来のエントロピーをあたかも回収するかのように、いずこかへ姿を消すことになるのである。

昼食を終え、取引場へ戻ろうとする時、ウィルヘルムは、目の不自由なラパポート老人に通りの向こうの葉巻屋へ連れて行ってくれるように頼まれる。株の値動きが心配でたまらないウィルヘルムは躊躇するが、タムキンはこの機会こそ「今・ここ」を実践する時であると彼を諭す。“This minute is another instance of the ‘here-and-now’. You have to live in this very

minute.... Don't think of the market. It won't run away. Show your respect to the old boy. Go ahead. That may be more valuable”(135). タムキンは、ウィルヘルムを「今・ここ」に繋ぎ止めることによって、過去と未来の思惑が交錯する商品取引所から彼を引き離し、究極の「今・ここ」を彼にもたらず葬儀場の場面へと彼を導くのである。

父アドラー博士に最終的に見放され、妻マーガレットにも先日付の小切手をめぐって最後通牒を突き付けられたウィルヘルムは、取引所からグロリアナ・ホテルへ、そしてブロードウェイへとタムキンの姿を捜し求めていくうちに、群衆の流れに抗しきれぬまま、見知らぬ男の葬式へ粉れ込む。このことは、行き場を失ったウィルヘルム自身の象徴的な死を予告するとともに、彼が数日前タイムズ・スクエアの地下道で突然感じた、不完全で欠点だらけの人間全体に対する限りない同胞愛、すなわち「もっと大きな本体」“a larger body”(113) への合流を暗示している。“...today, his day of reckoning, he consulted his memory again and thought, I must go back to that. That's the right clue and *may do me the most good*. Something very big. Truth, like”(115: イタリックは筆者)。このように思う彼にとって、究極的な真実が開示され、最後の審判が下される「この日」こそ、「見せかけの心」が破滅し、「本当の心」が「もっと大きな本体」へ合体するのにふさわしい日なのである。かつて「暗黒街」“underworld”(91) にいたことがあるというタムキンが、冥界を思わせる葬儀場の近くで、ウィルヘルムを見届けるかのように姿を消したことは、彼のウィルヘルムに対する〈騙り〉が完了するとともに、彼の施す〈癒し〉がいよいよ仕上げの段階に入ったことを示している。「決算日」である「この日」におけるウィルヘルムの総決算においては、タムキンの〈騙り〉は〈癒し〉へと反転し、経済的破綻とそれがもたらす精神的覚醒との収支が合うことになる。

礼拝堂に入ったウィルヘルムは、タムキンのことはすっかり忘却し、なぜか豊かな気持ちになり始める。棺に横たわる死者を前にして彼は、その見知らぬ男の死を悼んですすり泣くうちに、個人の死を遥かに凌駕するさらに深

い悲しみの源泉に触れ、やがて “deeper feeling”(158) から全身をふるわせ号泣し始める。そしてウィルヘルムは、まさしく大海原での溺死を思わせる究極の「今・ここ」において、今まで味わったこともない深い恍惚感に襲われる。

The flowers and lights fused ecstatically in Wilhelm's blind, wet eyes; the heavy sea-like music came up to his ears. It poured into him where he had hidden himself in the centre of a crowd by the great and happy oblivion of tears. He heard it and sank deeper than sorrow, through torn sobs and cries toward the consummation of his heart's ultimate need (159-60).

この瞬間においては、もはや「見せかけ」と「本質」の齟齬もなく、過去と未来の区別もなく、ウィルヘルムは自らのすべてを溶解させることによって、「もっと大きな本体」の海と合流すべく、悲しみの淵にとめどもなく深く沈潜していく。しばしば議論の別れるところではあるが、「心が究極に求める願望の成就へと向って悲しみよりもなおいっそう深いところへ沈んでいった」というこの結末は、専ら、ウィルヘルムの再生と勝利を物語っているのでもなければ、挫折と敗北を表しているわけでもない。むしろそれは、生と死が互いを支え合いながら拮抗する、ある明澄な均衡に彼が到達しつつあることを示している。姿を消したタムキンによって象徴的な “hydrotherapy” を施された彼は、トミー・ウィルヘルムなる人物の死を身をもって体験することによって、本来自分が帰属すべき、生者と死者が共存する「もっと大きな本体」へと限りなく融合していくのである。

結局のところタムキンは、生と死の双方の地平が開けた両義的世界へと、ウィルヘルムを導いたのである。「貨幣」がその存在のなかに死の痕跡を内在させるとともに、死をもたらす暴力と犠牲を飼い慣らし封じ込める、すぐれて文化的な装置であるとすれば、タムキンは、まさしくそのような両義的

な役割をウィルヘルムに対して果たしたと言える。彼は、「貨幣」がそうであるように、死の刻印を自ら負いながら、死（富）というエントロピーを一身に引き受け、死を生に反転させ蘇生させる媒介となっている。本来、贗物であるはずの贗医者タムキンは、自らを騙ることによってウィルヘルムを破壊の淵、すなわち生の世界と死の世界が分岐する境界領域に誘い、そこで彼に本物の〈癒し〉を施したことになる。そのような意味で、毒を孕んだタムキンは、ウィルヘルムに治癒的な効果をもたらす解毒剤として作用したのである。破壊者であると同時に創造者であり、贗物であると同時に本物であり、トリックを仕掛けると同時に医療儀式を施すトリックスター、タムキンの祖型は、「貨幣」のそれと同じく文化の古層にまで遡ることができるのである。

注

1. Maggie Simmons, "Free to Feel: A Conversation with Saul Bellow," *Saul Bellow*, ed. Tajiro Iwayama (Kyoto: Yamaguchi Shoten, 1982), p.203.
2. その代表的なものとしては、Clinton W. Trowbridge, "Water Imagery in *Seize the Day*," *Critique* 9.3 (1967), 62-73がある。
3. 例えば、S. Lillian Kremer, "An Intertextual Reading of *Seize the day*: Absorption and Revision," *Saul Bellow Journal* 10, 1 (1991), 46-56.
4. Gilead Morahg, "The Art of Dr. Tamkin," *Modern Fiction Studies* 25.1 (Spring 1979), 103-16. Rpt. in *Saul Bellow*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea, 1986), pp.147-59.
5. 拙論「メタフィクションとしての『旅路の果て』」、『大阪外大英米研究』第17号（1990）101-24頁を参照。
6. Morahg, "The Art of Dr. Tamkin," *Saul Bellow*, pp.158-59.
7. Saul Bellow, *Seize the Day* (London: The Alison Press, 1985), p.56.
以下、本文中のこの作品の引用とページ数は、この版に拠る。なお、訳文は大浦
暁生氏訳に拠る。

8. Molly S. Wieting, "The Function of the Trickster in Saul Bellow's Novels," *Saul Bellow Journal* 3.2 (1984), 24.
9. Roberto Birindelli, "Tamkin's Folly: Myths Old and New in *Seize the Day* by Saul Bellow," *Saul Bellow Journal* 7.2 (1988), 35-48.
10. ウィネバゴ族のトリックスター神話を分析したラディンによれば、北米インディアンのトリックスターには、最後の場面で医療儀式を行ったのちに姿を消すというパターンが概ね見られる。P. ラディン、K. ケレーニイ、C.G. ユング『トリックスター』（晶文社、1974）130頁、180頁を参照。因みに、同書271頁においてユングは、トリックスター神話それ自体も、「多くの神話と同じく、治療的な効果をもつと考えられる」と述べている。
11. Saul Bellow, *Henderson the Rain King* (New York: The Viking Press, 1959), p.285.
12. ベロー自身も、あるインタビューで次のように述べている。"The only 'fun' in the book is to be found in the exploitations of Wilhelm the dupe by Dr. Tamkin, a clumsy charlatan." Rockwell Gray, et al. "Interview with Saul Bellow," *TriQuarterly* 60 (1984), 29.
13. 『フンボルトの贈り物』に見られる贈与交換に関しては、拙論「Saul Bellow における富と贈与交換—*Humboldt's Gift* を中心に」『アメリカ文学研究』第31号（1994）57—71頁を参照されたい。
14. 岩井克人『ヴェニス商人の資本論』（筑摩書房、1985年）118-19頁。
15. 岩井克人、前掲書、124頁。
16. 貨幣と死、並びに貨幣と犠牲の関係については、今西仁司『貨幣とは何だろうか』（筑摩書房、1994年）が、貨幣の社会哲学の立場から示唆に富む議論を展開している。彼によれば、「貨幣は人間関係のなかの暴力性を一身に体现し、いわば関係のなかの犠牲者になり、そうすることで貨幣形式、つまりは関係の媒介者になる」。同書、25頁。
17. Michel Foucault, *Madness and Civilization: A History of Insanity in the Age of Reason*, trans. Richard Howard (New York: Vintage

Books, 1988) p.167-68.

18. タムキンの弁舌は、患者の琴線に触れ信頼を得ようとする古典的な贗医者 of 修辭的技巧を踏襲している。技量の乏しいいかさま治療師にとっては、医療行為そのものよりも、自己を宣伝し売り込む客寄せ口上のレトリックにすべてがかかっていた。彼らの誇張された修辭は、言わば患者の心につけこむ説得の心理学であり、それらは経歴の詐称、治療した名士の列挙、偽装された科学もしくは神秘主義への傾倒、古典語や専門用語並びに格言の濫用、不治の病の治癒と万能薬の開発、無償の治療の暗示などを特徴とする。タムキンのレトリックはこれらの要件をすべて満たしている。詳しくはロイ・ポーター『健康売ります——イギリスのニセ医者 of 話 1660—1850』田中京子訳（みすず書房、1993年）第四章「ニセ医者 of 文化」を参照のこと。

